

## 「と」による等位接続とイベント数量詞

佐藤 香織

### 0. はじめに

これまで、日本語のいわゆる遊離数量詞に関しては、遊離数量詞とそれが修飾する名詞句とが構成素を成すのかどうかということがよく議論されている。一般的に「と」によって等位接続できるのは同じ範疇の構成素に限られる」と考えられており、遊離数量詞とそれが修飾する名詞句（以下、「名詞句+格助詞+数量詞」）についても、「と」によってどのような範疇と等位接続されるかという観点からの分析が、最近では Koizumi (2000), 川添 (2002), 木村 (2003) などで行われている。その中で川添 (2002) は(1)のように、単独名詞句と等位接続が可能な「名詞句+格助詞+数量詞」は名詞句であると主張している。

(1) 私は [年賀はがきを200枚] と [大きなゴム印] を注文した。

(神尾1977:84)

しかし(2)のように同じ「取引先の訪問を3軒」という連鎖でも、単独名詞句と等位接続が可能な場合と不可能な場合がある。この場合、「名詞句+格助詞+数量詞」の「と」による等位接続の可否には、名詞句であるという範疇の条件以外の問題も関わっていることが伺える。

- (2) a. 部長は九州に出張する太郎に [取引先の訪問を3軒] と [下請工場  
の視察を2か所] 頼んだ。  
b. 部長は九州に出張する太郎に [取引先の訪問を3軒] と [下請け工  
場の視察を] 頼んだ。  
c. \*部長は九州に出張する太郎に [取引先の訪問を3軒] と [明太子を]  
頼んだ。

(2)から分かるのは、「取引先の訪問を3軒」という連鎖が「下請け工場の視察」のようなイベント名詞句とは等位接続が可能だが、「明太子」のようなモノ名詞句とは等位接続が不可能であることである。本稿では、このような違いが遊離数量詞自体の性質の違いに起因するものであることを示し、遊離数量詞が大きく3分類される可能性があることを論じる。

本稿の構成は次の通りである。まず2節では、イベント名詞句と等位接続が可能な「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖の性質及びその生起条件について論じ、この場合の数量詞を、イベントと何らかの関わりを持つ「イベント数量詞」と考えることを提案する。次に3節では、2節の分析を受けて、数量詞を「モノ数量詞」(「NP数量詞」及び「VP数量詞」)、と「イベント数量詞」とに分類する。そしてこれらの「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖がそれぞれどのような要素と等位接続されうるかを整理することで、(2)のような等位接続について一定の説明を与える。最後に4節では、まとめと今後の課題について述べる。

## 1. 先行研究

これまで「名詞句+格助詞+数量詞」が「と」によって等位接続されるかどうかは、Koizumi (2000), 川添 (2002), 木村 (2003) などの、数量詞を含む句の構成素性が何であるかという議論の中で、テストとして用いられてきた。本節では、これらの議論を概観し問題点及び本稿の立場を述べる。

### 1.1 Koizumi (2000)


Koizumi (2000) は自身の顕在的動詞上昇分析の根拠として、(3)のような一見構成素をなしていないように思われる要素が「と」で等位接続される例をあげ、これらが実は動詞句の等位接続であるためであると主張した。

(3) a. [学生が昨日2人] と [先生が今日3人] 来た (こと)

(Koizumi 2000 : 263)

b. メアリーが [ジョンにりんごを2つ] と [ボブにバナナを3本] あげた (こと)

(Koizumi 2000 : 228)

- (4) [VP 学生が昨日 2 人  $t_v$ ] と [VP 先生が今日 3 人  $t_v$ ] 来た v  
  
 [動詞繰り上げ]

Koizumi は全ての「と」による等位接続が動詞句であるとはっきり述べているわけではないが、この分析が正しければそのように分析される可能性が生じる。

## 1.2 川添 (2002)

一方、川添 (2002) は、Koizumi の顕在的動詞上昇分析を批判し、「帰一連鎖」(遊離数量詞とそれが修飾する名詞句だけからなる連鎖)については、(2)のように単独名詞句(「大きなゴム印」と等位接続が可能なことから、神尾(1977)やKawashima(1998)の単一構成素仮説を擁護する立場をとり、「遊離数量詞は、これが修飾する名詞句と全体で一つの名詞句をなす場合がある」と主張している。(2)を(5)に再掲する。

- (5) 私は [年賀はがきを200枚] と [大きなゴム印] を注文した。  
 (神尾1977: 84)

また川添は、(6)で示す「非帰一連鎖」(「と」によって等位接続できる連鎖のうち帰一連鎖以外のもの)に関しては(7)のように単独名詞句と等位接続が不可能であるため、少なくとも名詞句ではないとしている。またそれと同時に、もし(6)のような「非帰一連鎖」がKoizumiの主張するように動詞句の等位接続であるとすれば(7)のような等位接続も可能になるはずであり、等位接続される両方の動詞句内に数量詞が含まれていなければならないという規定をわざわざ仮定しなければならないKoizumiは妥当性に欠けると指摘している。

- (6) a. 太郎は、[花子に3枚] と [次郎に2枚]、CDをあげた。  
 b. [太郎が3本] と [次郎が4本]、フルボトルのワインを一気のみした。  
 c. [太郎が2回] と [次郎が3回] 警察に補導された。

(川添2002: 167-8)

- (7) a. \*太郎は、[花子に3枚] と [次郎に] CDをあげた。

- b.\* [太郎が3本]と[次郎]が、フルボトルのワインを一気のみした。  
 c.\* [太郎が2回]と[次郎]が警察に補導された。

(川添2002: 169-70)

このように、川添は「と」による等位接続の事実から、帰一連鎖は名詞句になりうるが非帰一連鎖は名詞句にはなりえないと主張している。ただし、非帰一連鎖をどのように分析するかは今後の課題であるとしている。

### 1.3 木村 (2003)

一方木村 (2003) は、川添の「非帰一連鎖」とは、実は Koizumi が主張するような動詞句をなす連鎖であると主張している。つまり川添の「帰一連鎖」は構成素としての名詞句をなすものであり、「非帰一連鎖」は動詞句あるいは節をなすものであるとしている。どちらの場合も、等位接続に課される一般的原理である「同じ範疇が等位接続される」という条件を満たさない場合に非文になると述べている。例えば、川添が Koizumi の問題点として指摘した(8)のような文についても、同じ範疇が等位接続されていないために非文法的になると説明される。

- (8) a.\* 太郎が [花子に3枚] と [次郎に] CDをあげた。 (川添2002: 169)  
           動詞句                  後置詞句  
 b.\* [太郎が100メートル] と [次郎が] 走った。 (川添2002: 170)  
           動詞句                  名詞句  
 c.\* 今年、 [修士の学生が3人] と [博士の学生が] 増えた。  
           動詞句                  名詞句                  (川添2002: 174)

### 1.4 先行研究の問題点と本稿の立場

上記で概観した先行研究の分析は、いずれも(2)のような現象については扱っていないため、うまく説明を与えることができない。(2)を(9)に再掲する。

- (9) a. 部長は九州に出張する太郎に [取引先の訪問を3軒] と [下請工場の視察を2か所] 頼んだ。  
 b. 部長は九州に出張する太郎に [取引先の訪問を3軒] と [下請け工場の視察を] 頼んだ。

- c. \*部長は九州に出張する太郎に〔取引先の訪問を3軒〕と〔明太子を〕頼んだ。

(9) のように同じ「取引先の訪問を3軒」という連鎖でも、単独名詞句と等位接続が可能な場合と不可能な場合がある。まず、川添(2002)の分析では「取引先の訪問を3軒」という連鎖は、遊離数量詞「3軒」とそれが修飾する名詞句「取引先」との間に「訪問」という名詞句が存在するため、非帰一連鎖として分析されると考えられる。しかし非帰一連鎖は、単独名詞句とは等位接続が不可能な連鎖であるはずなので、(9b)が適格である理由については川添(2002)の分析では説明できない。つまり、非帰一連鎖であっても単独名詞句と等位接続が可能な場合があることになる。(9b)(9c)から分かるように、「取引先の訪問を3軒」という連鎖が、「下請け工場の視察」のようなイベント名詞句とは等位接続が可能だが、「明太子」のようなモノ名詞句とは等位接続が不可能である理由を何らかの方法で説明する必要がある。

また、木村(2003)のような分析をするのであれば、(9b)は名詞句の等位接続のため適格文となり、(9c)は動詞句どうしを等位接続しなければならないのに名詞句と等位接続されているために非文となると考えるのかもしれないが、その場合、同じ連鎖(「取引先の訪問を3軒」)を違う範疇として分析しなければならなくなり、その理由について何らかの説明をしなければならない。

このように一見同じ範疇と考えられる連鎖が、等位接続において異なる振る舞いを見せる事実については、川添(2002)や木村(2003)の範疇の違いを中心にした議論だけでは、例外として処理されるに留まり、明確な説明を与えることができないと考えられる。また、動詞句繰上げの妥当性について本稿で論ずることは出来ないが、少なくとも(2)のような例に関しては、動詞句繰上げを仮定せずに説明することは可能であると考えられる。

## 2. イベントと関係を持つ遊離数量詞の特質

(2)のような、イベント名詞句と等位接続が可能な「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖は、遊離数量詞とホスト名詞がいわゆる相互c統御関係(Miyagawa, 1989)にない。佐藤(2002, 2003, 2004)では、このような遊離数量詞をIshii(1999)及び石居(2003)で提案された「VP数量詞」として捉えている。(10)に例文を示す。

- (10) a. 鈴木教授は太郎に〔論文の執筆〕を3本命じた。  
 b. 部長は秘書に〔レーザープリンタの導入〕を2台約束した。

Ishii (1999) 及び石居 (2003) は、日本語の遊離数量詞を NP-quantifier (NP 数量詞) と VP-quantifier (VP 数量詞) とに2分類した。この2種類の数量詞の違いは、以下のようにまとめられる。

- (11) NP 数量詞：ホスト名詞句と構成素をなし(相互 c 統御条件に従う),  
 distributive (分配的) 解釈と non-distributive (非分配的)  
 解釈の両方が可能である。  
 VP 数量詞：副詞としての分布(相互 c 統御条件に従わない)を示し,  
 distributive (分配的) 解釈に制限される。

distributive (分配的) 解釈とは、「ある出来事が複数回起こる」とする解釈であり、non-distributive (非分配的) 解釈とは、「ある出来事が単独で起こる」とする解釈である。つまり、(10)の場合には(12)のような分配的解釈のみが可能である。この場合、主文述語を遊離数量詞が分配的に量化した結果として、ホスト名詞の数量が間接的に量化されたということになる。

- (12) a. 鈴木教授は太郎に〔論文の執筆〕を3本命じた。  
 解釈：(これまでに) 執筆を 3本命じた。  
 → 「(複数回) 命じた」⇒ 「論文」 = 「3本」  
 b. 部長は秘書に〔レーザープリンタの導入〕を2台約束した。  
 解釈：(これまでに) 導入を 2台約束した。  
 → 「(複数回) 約束した」⇒ 「レーザープリンタ」 = 「2台」

しかし(10)は分配的解釈だけでなく、(13)のような非分配的解釈も可能であり VP 数量詞の定義を満たしていない。

- (13) a. 鈴木教授は太郎に〔論文の執筆〕を3本命じた。  
 解釈：(一度に) 執筆を 3本命じた。  
 → 「論文」 = 「3本」, 「命じた」 = 「1回」

- b. 部長は秘書に [レーザープリンタの導入] を 2台 約束した。

解釈：(一度に) 導入を 2 台約束した。

→ 「レーザープリンタ」 = 「2 台」, 「約束した」 = 「1 回」

本節ではこのような現象も踏まえて、(10)のようなイベント名詞句内部の要素を量化する遊離数量詞は、VP 数量詞としてではなく、「イベント数量詞」として分析されるべきものであることをいくつかの根拠から提案する。

## 2.1 VP 数量詞とイベント数量詞の基本的な違い

Ishii (1999) 及び石居 (2003) の VP 数量詞は、主文述語を副詞的に量化した結果として、ホスト名詞を間接的に量化するものである。そのため、ホスト名詞となりうる要素との間に構造的な制約はない。しかし、実際には(14)のように「NP の N」というイベント名詞句が補部の場合に、イベント名詞句内の名詞がホスト名詞になることができない場合があることを佐藤 (2003) では指摘した。

- (14) a. \*太郎がこの 1 年で [在外研究員の拡充] を 4人 提案してきた。

- b. \*人事部長がこれまでに [営業社員の昇給] を 20人 議題として取り上げた。

注目すべき点は、ホスト名詞が補部内の要素でない(15)では、(14)と比べると許容度が上がることである。

- (15) a. ?駐在員たちがこの 1 年で [在外研究員の拡充] を 4人 提案してきた。

- b. ?歴代の組合会長がこれまでに [営業社員の昇給] を 20人 議題として取り上げた。

この事実は、(14)に生起している数量詞をイベント名詞句補部と関係を持つイベント数量詞と考え、(15)の数量詞を VP 数量詞と仮定すれば説明可能である。まず、(14)(15)どちらにも「この 1 年で」等の分配的解釈を強制する副詞を共起させているので、Ishii の定義からは VP 数量詞が生起できるはずであり、(14)の数量詞は VP 数量詞ではない可能性が生まれる。そこでイベント数量詞であると考えると(14)が不適格になる理由が説明できる。(14)(15)のイベ

ント名詞句補部は、実際は「イベント」の生起ではなく「命題」を表しているため、イベント数量詞と関係を結ぶことができず、イベント名詞句内のホスト名詞を量化することができないのである。(14)(15)のイベント名詞句が、イベント名詞を用いていながら実は「命題」を表している根拠としては、(16a)のように「命題」を表す名詞節（「意見」「案」など）には置き換え可能であるが、(16b)のように「そのイベントがすでに実現したこと」を示す名詞節（「事実」「真実」など）に置き換えることが不可能であることがあげられる。

- (16) a. 地方大学の学長たちが [留学生を増員するという (意見/案)] を提案した/議題とした。  
 b. \*地方大学の学長たちが [留学生を増員したという (事実/真実)] を提案した/議題とした。

まとめると、名詞句補部が表わす内容が「イベント」であっても「命題」であっても VP 数量詞は文中に現れること自体は可能であるが、補部内の要素と関係を持つことはできない。一方イベント数量詞は、名詞句補部が「イベント」を表す場合にのみ文中に現れることが可能で、イベント補部内の名詞と関係を持つことができる。本研究では、イベント名詞句あるいはイベントを表すコト節内部の名詞を量化する遊離数量詞をすべて、VP 数量詞ではなくイベント数量詞と考える。

また、ここで指摘しておかなければならないことは、イベントを表す補部であっても「と」「ように」などのいわゆる CP 補部の場合は、イベント数量詞は生起できないという点である。一方、VP 数量詞の場合はそのような制限はない。(17a)(17b)はイベント数量詞を生起させた例であり、(17a')(17b')はVP数量詞の例である。

- (17) a. \*これまでにNGOのメンバーが政府に [難民を受け入れるように] 3人頼んだ。  
 a'. これまでにNGOのメンバーが政府に [難民を受け入れるように] 3人頼んだ。  
 b. \*これまでに政府高官が [人質を明日中に救出すると] 3人約束した。  
 b'. これまでに政府高官が [人質を明日中に救出すると] 3人約束した。



VP 数量詞とイベント数量詞の更なる違いとして捉えられる点は、イベント補部内の名詞句と数量詞が関係を持つ(18a)(18b)のような場合、(18a')(18b')の擬似分裂文による焦点化テストからわかるように「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖が統語的構成素であるかのようなまとまりをなすことである<sup>2</sup>。(19a)(19b)も Ishii の VP 数量詞を含む文として考えられる文であるが、擬似分裂文にした(19a')(19b')において「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖はまとまりをなさない。

- (18) a. この3日間で、鈴木教授は [学生の受け入れを2人] 約束した。  
 a'. この3日間で鈴木教授が約束したのは [学生の受け入れを2人] だ。  
 b. これまでに、政府は [難民の入国を50人] 認めた。  
 b'. これまでに政府が認めたのは [難民の入国を50人] だ。
- (19) a. ?この3日間で、鈴木教授は [学生の作品を2人] 手直した。  
 a'. \*この3日間で鈴木教授が手直したのは [学生の作品を2人] だ。  
 b. ?これまでに、政府は [難民の申請書を50人] 受け取った。  
 b'. \*これまでに政府が受け取ったのは [難民の申請書を50人] だ。

本節では、Ishii (1999) 及び石居 (2003) で VP 数量詞とされているものの中に、明らかに性質の異なる2種類が含まれていることを指摘し、一方を従来の定義どおり VP 数量詞とし、もう一方をイベント数量詞と考えることを提案した。

## 2.2 補部イベントの性質から見たイベント数量詞

本節では、イベント数量詞の更なる特質について、補部イベントの性質に着目して考察する。イベント数量詞は、名詞句補部がイベントを表す場合に常に生起可能であるわけではない。

- (20) a. 非分配的解釈  
 太郎はその業者に一度に [パソコンの修理] を10台頼んだ。  
 b. 分配的解釈  
 太郎はその業者にこの2ヶ月で [パソコンの修理] を10台頼んだ。
- (21) a. 非分配的解釈  
 ?? 太郎はその時入国審査官に [不法難民の入国] を5人伝えた。

## b. 分配的解釈

\*太郎はこの2ヶ月で入国審査官に〔不法難民の入国〕を5人伝えた。

(20) (21)では、イベント名詞句の表すイベントの性質が異なっている。(20)のイベント名詞句「パソコンの修理」が表すイベントは、主文動詞「頼む」の表すイベントが実現されない限り、論理的、時間的に実現されることができない。一方、(21)のイベント名詞句「不法難民の入国」が表すイベントは、主文動詞「伝える」の表すイベントよりも先に成立しているか、今後の実現が確定されている。佐藤(2002)では、(20)のイベント名詞句が表すような「まだ実現するかどうか確定していないイベント」のことを「実現が未確定なイベント」とし、(21)のイベント名詞句が表すようなイベントを「実現が確定されたイベント」とした。これらのイベントの性質の違いは、次のようにコト節にした場合にさらに明示的になる。

## (22) 実現が未確定なイベント

- a. 太郎は教授に〔論文の訂正〕を約束した。
- b. 太郎は教授に〔論文を訂正(する/\*した/\*している)こと〕を約束した。
- c. \*太郎は教授に〔論文を訂正することにしたこと〕を約束した。

## (23) 実現が確定されたイベント

- a. 太郎は教授に〔論文の訂正〕を伝えた。
- b. 太郎は教授に〔論文を訂正(する/した/している)こと〕を伝えた。
- c. 太郎は教授に〔論文を訂正することにしたこと〕を伝えた。

「実現が未確定なイベント」の場合は、(22b)で示されるように補文末が「スル」形に制限され「シタ/シテイル」形は不可能であり、意味的に捉えると、「論文を訂正する」というイベントは発話時点では「未実現」の出来事である。一方「実現が確定されたイベント」の場合は、(23b)のように補文末の時制に関する制限はなく、意味的には「論文を訂正する」というイベントが発話時において「未実現」である場合と既に「実現」されている場合両方の可能性がある。しかし、(22b)のスル形が表す「未実現」と(23b)のスル形が表す「未実現」とは性質が異なり、(22b)のスル形は(22c)のように補文末のスル形をシタ形にさらに埋め込んでコト節を作ることはできないが、(23b)のスル形では

(23c)のように可能である。このことから一見同じスル形でありどちらも「未実現」のイベントを表していることは確かだが、(22)の場合は「イベントが将来実現されるかどうかは未確定」であるのに対し、(23)の場合は「イベントの実現が確定」されていることがわかる。

それではなぜイベント数量詞は、「実現が確定されたイベント」には生起しにくく、「実現が未確定なイベント」の場合に生起可能なのだろうか。この理由については佐藤（2004）での議論をもとに、次節で述べる。

### 3. 数量詞の分類と等位接続

本節では2節の分析を受けて、数量詞を「モノ数量詞」（「NP数量詞」及び「VP数量詞」）、と「イベント数量詞」とに分類する。そしてそれぞれの数量詞が、「名詞句＋格助詞＋数量詞」の連鎖をなす場合にどのような要素と等位接続されるかを整理することで、(2)のような等位接続について一定の説明を与える。

#### 3.1 「モノ数量詞」と「イベント数量詞」の区別

本稿では、遊離数量詞の体系を次のように考える。

##### (24)①モノ数量詞

- a. NP数量詞（Ishii(1999)及び石居(2003)の「NP数量詞」と一致。）
  - ：モノ名詞を直接的に量化する数量詞
  - ホスト名詞であるモノ名詞句と local な関係がある。
- b. VP数量詞（Ishii(1999)及び石居(2003)の「VP数量詞」と一致。）
  - ：モノ名詞を主文動詞を介して分配的に量化する副詞的数量詞
  - ホスト名詞であるモノ名詞とは local な関係がない。

##### ②イベント数量詞

- ：イベントと関係を持つことによってモノ名詞を量化する数量詞
- ホスト名詞を含むイベント補部名詞句と何らかの local な関係が仮定されるが、ホスト名詞であるモノ名詞自体とは local な関係がない。

これまで見てきたように、本稿でイベント数量詞と仮定した数量詞は、明らか

に NP 数量詞や VP 数量詞とは、認可の仕方が異なっている。2.1では VP 数量詞との構造的、意味的違いを示した。また、NP 数量詞と比べた場合にも、NP 数量詞のようにホスト名詞と相互 c 統御関係ではなく、NP 数量詞と考えることは難しい。そこで本稿では、2.2で示したような「実現が未確定なイベント」を表す名詞句と local な関係を持ち、その結果としてモノ名詞を量化する第三の数量詞として、イベント数量詞を仮定する。

イベント数量詞と「実現が未確定なイベント」を表す名詞句との local な関係については、2.1で「名詞句+格助詞+数量詞」に統語的まとまり性があることを示したが、イベント数量詞は(25a, b)と(25c)の対立から分かるように、イベント名詞句と構造的に近い位置にあることが要求される。

- (25) a. プレア首相が陸軍総司令官に [兵士の派遣] を200人命じた。  
 b. プレア首相が陸軍総司令官に200人 [兵士の派遣] を命じた。  
 c. ??プレア首相が200人陸軍総司令官に [兵士の派遣] を命じた。  
 cf. \*国会議員が50人首相に [兵士の派遣] を勧めた。
- (26) a. 鈴木校長が [交換学生の入学] を20人許可した。  
 b. 鈴木校長が20人 [交換学生の入学] を許可した。  
 cf. \*教員が20人 [交換学生の受け入れ] を認めた。

また、(25cf) (26cf)でイベント数量詞が成立不可能なのは、「国会議員が50人」「教員が20人」というように、「国会議員」「教員」をホストとする NP 数量詞として分析される可能性が生じるためと考えられる。

### 3.2 イベント数量詞の生起条件

2.2で、イベント数量詞は「実現が確定されたイベント」には生起しにくく、「実現が未確定なイベント」の場合に生起可能であると述べた。このような性質を持つ量化表現は、イベント数量詞以外にも存在する(佐藤, 2004)。それは、「-回」「-度」などの度数副詞<sup>5</sup>や記述の二次述部<sup>6</sup>である。これらも、モノ数量詞のように単文に生起する場合と、イベント数量詞のようにイベント補部名詞句を含む文に生起する場合がある。遊離数量詞と並行的に捉えるのであれば、イベント補部名詞句を含む文に生起する場合は「イベント量化詞」と呼ぶことが可能かもしれない。注目すべき点は、この「イベント量化詞」の生起にも、2.2で述べたようなイベントの性質の違いが反映しているということ

ある。

まず、(27)で示すように度数副詞「一回」「一度」は、補部名詞句が「実現が未確定なイベント」の場合は、イベント名詞句が表すイベントの回数を量化することが可能だが、(28)の「実現が確定されたイベント」の場合は不可能である。

(27) 実現が未確定なイベント

- a. 太郎は一日の仕事として、娘に〔花の水遣り〕を3回命じた。  
(「水遣り」 = 「3回」という解釈が可能)
- b. 課長は秘書に〔会議室の掃除〕を2回頼んだ。  
(「掃除」 = 「2回」という解釈が可能)
- c. 太郎が後輩たちに〔練習への参加〕を3回約束した。  
(「参加」 = 「3回」という解釈が可能)

(28) 実現が確定されたイベント

- a. 花子は記者たちの前で〔知事のセクハラ〕を3回暴露した。  
解釈：「暴露した」 = 「3回」(≠ 3回の知事のセクハラ)
- b. そのキャスターは自分の番組で〔来月の総理の中東訪問〕を2回取り上げた。  
解釈：「取り上げた」 = 「2回」(≠ 2回の総理の中東訪問)
- c. 今日の午後、FM局は〔台風九州への上陸〕を3回伝えた。  
解釈：「伝えた」 = 「3回」(≠ 3回の台風の上陸)

また、(29)(30)のように、記述の二次述部の生起の可否にも補部イベントの性質の違いが関わっている(佐藤, 2002)。

(29) 実現が未確定なイベント

- a. 太郎はケンに〔カツオの試食〕を生で勧めた。
- b. 太郎は娘に〔卵の調理〕を半熟で頼んだ。

(30) 実現が確定されたイベント

- a. \*太郎はケンに〔カツオの試食〕を生で伝えた。
- b. \*太郎は娘に〔卵の調理〕を半熟で教えた。

それではなぜイベント数量詞やイベント量化詞は、「実現が確定されたイベント」には生起しにくく、「実現が未確定なイベント」の場合に生起可能なの

だろうか。本稿では、モノ数量詞が不定名詞句のみを量化することと対応させて、この現象を考える。一般的に、遊離数量詞のホストとなる名詞句は不定名詞句に限られており、定名詞句はホストになることが出来ない。Ishii (1997)では次のような例が挙げられている。

- (31) a. ジョンが本を3冊買った。  
 b. \*ジョンがそれらの本を3冊買った。

また、度数副詞が単文に現れる場合にも、モノ名詞句を(間接的に)量化するためには(32)で示すように少なくともモノ名詞句が不定でなければならず、(33)のように定名詞句の場合は量化することはできない。

- (32) a. 太郎がホームランを40回打った。  
 解釈: 「ホームラン」=40本  
 b. 花子が友人に10回手紙を送った。 (北原, 1996)  
 解釈: 「手紙」=10通  
 (33) a. 太郎が映画館で「ハリーポッターと賢者の石」を2回観た。  
 b. 太郎が3回その会社を訪問した。 (佐藤, 2004)

「モノ名詞句」が「不定」であればモノ数量詞が生起可能になるという現象は、補部の「イベント名詞句」が「未確定」なイベントを表すのであれば、イベント数量詞(量化詞)が生起可能になるという現象と並行性があると考えられる。つまり、モノ名詞句であれイベント名詞句であれ、「まだ確定されていないもの」であれば名詞句の外側から量化可能であるが、すでに「確定されたもの」の場合は量化不可能であるということである。ホスト名詞の観点から見た、モノ数量詞とイベント数量詞の生起条件を(34)にまとめる。

- (34) ホスト名詞の性質から見た遊離数量詞の生起条件  
 モノ数量詞の生起条件→◎ホスト名詞は不定のモノ名詞でなければならない。  
 イベント数量詞の生起条件→◎ホスト名詞は不定のモノ名詞でなければならない。

- ◎ホスト名詞が含まれるイベント名詞句の表すイベントの性質が「実現が未確定なイベント」でなければならない。

### 3.3 等位接続

本節では、モノ数量詞（「NP 数量詞」及び「VP 数量詞」）、とイベント数量詞が、「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖をなす場合にどのような要素と等位接続されるかを整理し、(2)のような等位接続について一定の説明を与える。

まず、モノ数量詞である「NP 数量詞」が、「名詞句+格助詞+数量詞」の連鎖をなす場合を観察する。

#### (35) 「名詞句+格助詞+NP 数量詞」の等位接続

- a. 私は [年賀はがきを200枚] と [ゴム印を 3 個] 注文した。
- b. 私は [年賀はがきを200枚] と [大きなゴム印] を注文した。
- c. \*?私は弟に [年賀はがきを200枚] と [クリーニングの受け取り] を頼んだ。

(35)から「名詞句+格助詞+NP 数量詞」の連鎖については、「大きなゴム印」のようなモノ名詞句との等位接続は可能であるが、「クリーニングの受け取り」のようなイベント名詞句との等位接続は許容度が下がることが分かる。つまり、「名詞句+格助詞+NP 数量詞」と等位接続が可能な要素の条件としては、範疇がNPであるという条件に加えて、モノ名詞句でなければならないという条件が更に加わる。

次に、モノ数量詞である「VP 数量詞」の場合を考える。

#### (36) 「名詞句+格助詞+VP 数量詞」の等位接続

- a. \*この2時間で学生が [その雑誌を 5人] と [スポーツ新聞を 3人] 買っていった。
- b. \*この2時間で学生が [その雑誌を 5人] と [スポーツ新聞] を買っていった。

「VP 数量詞」は副詞的数量詞であり、主文動詞を量化する要素であるので、「名詞句+格助詞+VP 数量詞」の部分の連鎖が統語的構成素をなすとは考え

にくい。実際に、2.1 (19)では擬似分裂文になることが不可能であることを示した。同一範疇が等位接続されるとする木村 (2003) の考え方にしたがえば、(36b)のようにモノ名詞句と等位接続不可能であることは予測される結果である。しかし、もし Koizumi (2000) や木村 (2003) が主張するように動詞句の等位接続の際に主要部移動が起きているのであれば、(36a)の連鎖はどちらも VP であり、適格文になるはずではないだろうか。更に(37a)のように、ホスト名詞を連鎖内に含めた場合も等位接続は不可能であり、(37b)のように VP 数量詞の直後に顕在的な動詞を出現させて接続した文は適格文になる。

- (37) a. \*一週間の間に [女子学生がその雑誌を5人] と [男子学生がスポーツ新聞を3人] 買っていった。  
 b. 一週間の間に [女子学生がその雑誌を5人買ったの] と [男子学生がスポーツ新聞を10人買ったの] は覚えている。

これらのことから、「名詞句+格助詞+VP 数量詞」の連鎖の範疇は、Koizumi (2000) や木村 (2003) が主張するような、主文動詞の痕跡が含まれている「VP」ではなく、構成素をなさない連鎖である可能性が示唆される。ただし、Koizumi (2000) や木村 (2003) は VP 数量詞を認める立場ではなく、この連鎖が VP ではないとしても、彼らの分析自体を否定するものではもちろんない。これ以上の詳細な分析は別稿に譲ることとしたい。

最後に、イベント数量詞の場合について考える。

- (38) 「名詞句+格助詞+イベント数量詞」の等位接続  
 a. 太郎はその業者に [パソコンの修理を3台] と [プリンタの検査を2台] 頼んだ。  
 b. 太郎はその業者に [パソコンの修理を3台] と [プリンタの検査] を頼んだ。  
 c. \*太郎はその業者に [パソコンの修理を3台] と [プリンタ] を頼んだ。

(38)から「名詞句+格助詞+イベント数量詞」の連鎖は、「プリンタの検査」のようなイベント名詞との等位接続は可能であるが、「プリンタ」のようなモノ名詞句との等位接続は、許容度が下がることが分かる。つまり、「名詞句+



格助詞＋イベント数量詞」の連鎖と等位接続が可能な要素の条件としては、範疇がNPであるという条件に加えて、イベント名詞句でなければならないという条件が更に加わると考えられる。

元来、数量詞を含まない連鎖の場合には、モノ名詞句とイベント名詞句は「同一範疇条件」を守り、若干許容度は落ちるものの等位接続が可能である。

- (39) a. ?花子は出かけようとする息子に [郵便物の受け取り] と [ケーキ] を頼んだ。  
 b. ?花子は離婚にあたって夫に [マンションの売却] と [車] を要求した。

しかし、これまで見てきたようにイベント数量詞とイベント名詞句とが統語的まとまりを構成すると、モノ名詞句とは等位接続が不可能になる。

- (40) a. \*花子は出かけようとする息子に [郵便物の受け取りを3通] と [ケーキ] を頼んだ。  
 b. \*花子は夫に [マンションの売却を2棟] と [車] を要求した。

以上、NP数量詞、VP数量詞、そしてイベント数量詞を含む連鎖の等位接続について観察してきたが、それぞれの連鎖の性質には、数量詞の性質の違いが反映されていることが明らかになった。主要部移動などの可能性について論じる場合にも、本稿で示したような数量詞の性質の違いを考慮に入れて考察を進めていく必要があると思われる。

#### 4. 終わりに

本稿では、日本語の遊離数量詞がモノ数量詞（「NP数量詞」及び「VP数量詞」）とイベント数量詞とに分けられることを提案し、特にイベント数量詞の特質について詳細に論じた。そして、イベント数量詞を仮定して遊離数量詞を3分類することにより、それぞれの数量詞の性質の違いが、「名詞句＋格助詞＋数量詞」の連鎖の等位接続の可否に反映されていることを示した。イベント数量詞とイベント名詞句との構造的な関係をどのレベルでどのように保障するのかという問題に関しては今後の課題として残るが、数量詞の統語研究におい

て本稿で示した現象は新たな観点を提供しようと考えている。更に、このイベント数量詞という道具立てが、他の文法現象を分析する場合に有効な分析を提供しようことを今後示していければと考えている。

#### 注

- 1 本稿の「イベント名詞」とは、「採用」「販売」など、出来事を表し項構造を持つ名詞のことを指す。この定義は Kikuchi (1994) に従っている。
- 2 佐藤 (2004) 参照。
- 3 「実現が未確定なイベント」とは、基本的にはコントロール述語（約束する、命じる、頼む、等）の名詞句補部が表すイベントである。しかし、必ずしもコントロール述語の補部だけではなく補文主語が顕現化する次のような補部も含まれる。  
(i) 政府は「難民の入国」を3000人許可した。
- 4 「実現が確定されたイベント」とは、基本的には非コントロール述語（発話伝達動詞、叙述動詞）の補部である。
- 5 度数副詞がイベント名詞句内の名詞と関係を持つ場合、イベント数量詞とは、ホスト名詞との構造的関係が異なっている。度数副詞のホスト名詞はイベント名詞そのものであり、度数副詞とホスト名詞とは相互 c 統御条件にある。(例文 (27) 参照)。詳細は佐藤 (2004) を参照。
- 6 日本語の記述の二次述部は、「名詞+デ」あるいは動詞の分詞形で表される。詳細は竹沢 (2001) 等を参照。

#### 参考文献

- 石居康男 (2003) 「(第3章) 名詞句移動」石居康男・西垣内康男『英語学モノグラフシリーズ13 英語から日本語を見る』pp. 51-108, 研究社
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタククス」『言語』vol. 6, no. 9, pp. 83-91.
- 川添愛 (2002) 「「と」による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122号, pp. 163-180.
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186, pp. 29-42.
- 木村宣美 (2003) 「遊離数量詞の構成素性について」『人文社会論叢』第9号, 121-137, 弘前大学人文学部
- 佐藤香織 (2002) 「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』2巻2号, pp. 112-127.
- (2003) 「VP 数量詞のホスト名詞の決定要因について—ヲ格名詞句補部とニ格名詞句補部の比較から—」『筑波応用言語学研究』10, pp. 17-27, 筑波大学人文社会科学研究所文芸・言語専攻応用言語学領域
- (2004) 「イベント補部を量化する副詞的数量表現—度数副詞と遊離数量詞の共通性—」『日本語と日本文学』38号, pp. 15-23, 筑波大学国語国文学会

- 竹沢幸一 (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類－記述的考察を中心に－」  
『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度Ⅳ』, pp.237-264, 筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究組織
- Ishii, Yasuo. 1997. On Weak and Strong NPs in Japanese: A Preliminary Study. *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language (1)*. pp.109-123. Kanda University of International Studies.
- Ishii, Yasuo. 1999. A Note on Floating Quantifiers in Japanese. *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp.236-267. Tokyo: Kaitakusha.
- Kawashima, Ruriko. 1998. The Structure of Extended Nominal Phrases: The Scrambling of Numerals, Approximate Numerals, and Quantifiers in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp.1-26.
- Kikuchi, Akira. 1994. Extraction from NP in Japanese. *Current topics in English and Japanese*. pp.79-104. Tokyo: Hituzi Shobo.
- Koizumi, Masatoshi 2000. String Vacuous Overt Verb Raising, *Journal of East Asian Linguistics* 9, pp.227-285.
- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press